



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

（第一二五号）

雨うすい水

二月一九日



看板

看板役者に看板娘。スター役者や美しい娘の店番は、さながら店頭に掲げられた表看板のごとく、お客さんをひきつけます。

屋号や商品、創業年などを記した看板。江戸時代には、のれんや板、行灯、旗などに文字や絵を書いたもののほか、実物や立体の作り物も用いられたといえます。お店の顔だけに、店主の思いが込められたものもあり、東京の老舗あんこう鍋店「いせ源」の看板は、多くのお客さんに食してもらいたいと、虫食いの舟板を使っているほどです。

おかげ横丁にも年末あたりから、新しい看板がお目見えしました。「すし久」の格子窓には、看板商品のでこね寿司の絵柄が彫られた看板がかかっています。白木にノミ跡も新しい看板は、伊勢一刀彫の岸川さんの手なもの。伊勢の伝統工芸が看板になっています。

もうひとつは、おかげ横丁の道案内板。「はいからさん」前の四つ辻に立つ木製の案内板は、木漆作家の野嶋峰男さんが製作しました。漆をほどこした板に白い手書き文字が、ほかにはない温もりを出しています。野嶋さんはすでに「くつろぎや」「孫の屋三太」「くみひも平井」など多くの看板を手がけられていますから、看板ウォッチングはいかがでしょう。

「伊勢の伝統工芸の力を借りて、店の看板を作った」と企画した伊勢福の橋川史宏社長。伝統工芸というと敷居が高いように感じますが、このように身近なところで目にするると親近感を覚えます。工芸品は使われてこそ、その価値が見出されます。多くの参拝者を迎えるおかげ横丁で、伊勢の伝統工芸は「顔」となっているのです。

文

千種清美



伊勢内宮前